川上　澄 先生

（かわかみきよし）

先生は弘前大学教育学部教授であり、また、心身医療、とくに消化器の心身症治療の第一人者であることは周知のことですが、また日本交流分析学会の創立者のお一人でもありました。

先生は学会の第１回大会（昭和51年）のシンポジウムで、「医学における交流分析の応用」のテーマで講演されております。しかし、すでにそれ以前に、昭和49年７月という早い時期に第７回医学心理療法研究会―これは米子で開催されましたが、佐々木大輔先生とともに「実地医家のための心身医学的療法」として、交流分析の立場からご発表されておられます。

弘大第一内科で出版された先生の追悼集の中で、奥様が、先生は「何ごとにも前向きで、チャレンジ精神旺盛で、決断が早く一度決めたことを翻すのが大嫌いであった」と述べておられますが、これは先生の交流分析への取り組みにも言えると思います。先生は遠方にもかかわらず、学会はもとよりＴＡの講習会のためにも各地に出向かれ、ナース、コーメディカルを熱心に教育してくださいました。結婚式の折りなどには「親の心、子の心」というお話をよくされた、ともお聞きしております。

1983年（昭和58年）第８回の日本交流分析学会大会は川上会長、佐々木準備委員長のもと、弘前市で開催されました。先生は会長講演の中で、心身症、神経症の患者といえども、すべての症例に交流分析が必要であるということではないこと、したがって、どのような症例に交流分析をどのように利用すればよいのか、ということを研究することも大切である点、また交流分析の適応症、限界についても論及されました。

さらに、医学の場での治療で交流分析を利用する場合と、個人の性格の成長をめざして教育面で利用する場合とでは、自らその方法も異なってくる点についても強調されておられます。

今日、東北の地において本法を学ばれる方が多いのは、先生とその学徒のお力によるところが大きいのです。